



基幹プログラム

多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策

「多様性世界の平和的共生の方策」研究会

研究代表者: 位田 隆一 国際高等研究所副所長
滋賀大学学長

多様な価値観、倫理観、宗教、考え方を有する国家や人々が平和的に共生するためにはどうしたらよいか。寛容と協調、互恵の精神を大切にしながら、人間の尊厳に立ち戻り、日本から新しい指標を提示して平和的共生のための価値観を構築する。平和的共生を実現するための要素を指標として提示し、その基盤となる考え方を広く世界に発信していく。



参加研究者リスト

氏名	所属・役職
位田 隆一	国際高等研究所副所長 滋賀大学学長
吾郷 真一	立命館大学法学部教授
大芝 亮	青山学院大学国際政治経済学部教授
高阪 章	関西学院大学国際学部教授
内藤 正典	同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
中西 久枝	同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
中西 寛	京都大学公共政策大学院教授
東 大作	上智大学グローバル教育センター准教授
福島 安紀子	青山学院大学地球社会共生学部教授
星野 俊也	大阪大学大学院国際公共政策研究科教授
峯 陽一	同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
最上 敏樹	早稲田大学政治経済学部教授
モジュタ・バドリヤ	Director, Think Tank for Knowledge Excellence
モンテ・カセム	立命館大学国際平和ミュージアム館長
前田 直子	京都女子大学法学部准教授

研究目的・方法

現代は多様性の世界である。さまざまな考え方、価値観、倫理観、宗教等を持つ人々や社会、国家が平和的に共生できない原因は何か。その原因を取り除くための方策、そこから平和的共生に到る道道をどうすれば描けるかについて検討する。そのために、現在広く使われている経済活動の指標であるGDPに代わって、人間中心の価値観に基づく指標を提言し、これを世界に発信して、多様性世界におけるレベルでの平和的共生の実現に進める。

人類はこれまで倫理、道徳、あるいは宗教などによって、対立や紛争、戦争や暴力を克服する努力をしてきた。類似の課題は既に世界の各所で取り上げられ議論されているので、これらを集積し俯瞰的に批判、検討したうえで、寛容と協調、互恵の精神を持つ日本の価値観を基盤として新しい指標を検討することによって、日本発の他にない提案ができ、世界におけるこの種の議論をリードすることができる。

研究は以下の4段階に分けて行う。1)与えられた課題である「人間中心の価値観に基づく平和的共生のための方策」を概念としてどう捉えるか。2)GDPに代わる人間中心の価値観に基づく「指標」とはどのようなものか。欧米中心の価値観のみではなく、日本、アジア、イスラム、アフリカといったさまざまな価値観を統合する要素を探究して、指標化する。3)新しい指標をさまざまなレベルに試行的に適用して、指標の実効性を検討する。4)策定した新しい指標とその基盤となる考え方を、日本から世界に発信し、議論を提起する。

2016年度実績報告

2016年度は、上記4段階のうち、1)~3)を中心に、新たな指標の構築及び世界への発信に向けた基盤づくりに取り組み、それらを踏まえ中間報告の取りまとめを進めた。報告の概要は以下の通りである。

1. 基軸となる概念

研究の最終目的である平和的共生の指標を策定するために、我が国から発信する場合の基軸となる概念について議論を行い、その結果、以下の見解に至っている。

(1)多様性

多様性は、それぞれの地域の人々の歴史のなかで発展してきたが、世界各地の自然環境の相違にも多大に影響されている。人々は、それぞれの自然環境に対応するかたちで、政治や経済、そして文化を育んできたからである。多様性世界における平和的共生の方策を考えるためには国の政治・経済の仕組みや人々の文化・思想だけでなく、自然環境の相違といった要素も考慮しなければならないことが示唆されている。多様性世界でいかに平和共生を図るかという問いの設定とともに、そもそも多様性世界をいかに維持していくかという課題も設定して、解決策を模索すべきである。

(2)平和的共生

「平和的共生Peaceful co-living」は、「平和的共存」が国家間レベルで、冷戦を背景に用いられたのに対して、国家や社会の中で生きている人々にも焦点を当てたより広い概念である。単に国家と国家のみの関係、その意味で伝統的な国際関係のみを考えるのではなく、そこで暮らす人々の安寧と幸福を念頭に置いている。



2. 中核要素

指標の基礎となりうるであろうキーワードを抽出した。これらを通じた指標を今後の研究で策定していく。

(1)人間(人間の尊厳、人間中心)

平和的共生の指標を策定するにあたって第1に重要なキーワードは「人間」である。これは「人間の尊厳」や「人間中心」といった言葉で用いられる。この「人間」というキーワードを通じて、個としての人間と集団(コミュニティ、地域、国家等)としての人間の双方を把握することができる。しかし、例えば「人間の尊厳」とは何か、を説明することは容易ではない。ここでは生命倫理分野で用いられる自律性(autonomy)、善行(beneficence)、無危害(non-maleficence)、正義(justice)、連帯(solidarity)、衡平(equity)の諸原則も参考になる。

(2)発展(development)

いうまでもなくこの「発展」というキーワードは経済的観点からのものではない。国際連合で用いられてきた「development」は、近年のMDGs(ミレニアム開発目標)やSDGs(持続可能な開発目標)に示されること、経済的発展(開発)を超えて、社会的発展、人間開発にも用いられる用語である。ここでは、経済、健康、教育などにおける格差の存在と実態が発展にどう影響するかが重要な課題である。また格差には経済的のものだけでなく、資源アクセスやガバナンスなどの分野における格差も考慮する必要がある。

(3)アイデンティティ

人間はそれぞれが個としてのアイデンティティをもつ。この個性・独自性は、個人のみならず集団についても重要であり、それが多様性の源泉である。またアイデンティティは他者との相対関係で決まるものであり、そこから相互の関係が表出し、同時に相互尊重の重要性が導かれる。なお、「国」という集団の持つアイデンティティがこれまで大きかったが、国家のみならず非国家集団の活動・行動が急速に拡大している現状において、国家間の平和という旧来の図式が必ずしもあてはまらなくなる可能性があり、国のアイデンティティとは何か、ということ自体も検討しなければならない。

(4)主観と客観

多様性を考えるにあたっては、自己と他者の存在が前提であり、したがって、それぞれの主体(個人から集団まで)がその主観的な評価・判断とともに、客観的な評価・判断も探ることになる。そこで、主観的要素をどのように計り指標化するかが課題であり、そこから、ここに述べているようなキーワードも含めて、指標に必要な構成要素が何かを考えることになる。また指標とその構成要素の間で順序付けが必要である。

(5)inclusivenessとexclusiveness

多様性世界におけるさまざまなレベルの構成員間の平和的共生を語る場合には、その構造的要因にも注目しなければならない。とりわけ、多様性を基礎とした世界を考える場合には、疎外されてきた者の参加が不可欠である。しかしそのことはまさに、現実の社会における排外性(exclusiveness)の裏返しであることも見逃してはならない。

(6)我々はどこに生きているのか: 場所・環境・時間

多様性世界における指標を考えるにあたっては、現在生きている我々、そしてこれから生きるべき将来世代について、時代、地域(国内・国外・地球)、関係(国際や民族等の集団間)など、指標を設定する枠組みを設定することが必要である。その場合、特に時間軸を念頭に置かなければならない。単に多様性の社会や国際社会といった一般的前提では一律に検討できないと考えられる。

3. 指標の試み

既存の指標のように現状を評価するための指標ではなく、平和的共生の世界に到達した場合にはそれらの指標の持つ基準が満たされているべきものとしての指標である。したがって、本質的に目的志向性のある質的な指標であり、量的または数値的指標ではない。

現段階では、基軸概念や中核要素を導き出したが、まだ指標を固めるに至っていない。今後の研究の中で、紛争終了後の地域住民アンケート調査の実施と併せて、これらをより明確にしていきたい。アンケート調査では、対象地域で意識調査を行い、共生の度合いや軍事的な紛争が起きるリスクを測り、平和的共存に資するデータを集める計画である。



今後の計画・期待される効果

2017年度は中間報告を踏まえ、パイロット・スタディの一環として海外での現地調査の実施を準備する。更に、2018年度以降に様々な地域での現地調査を実施するために競争的外部資金の導入を試みるとともに、最終報告を作成する。